

書評

Erica Marat, *The Military and the State in Central Asia: From Red Army to Independence*, London and New York: Routledge, 2010, x+160 pp.

湯浅 剛

合法的な暴力装置としての国軍は、国家の存立にとって重要な機構である。とりわけ独立間もない国家にとって軍の創設とは、国家建設の主要な事業の一つに数えることができる。一般に、脆弱かつ民主主義の定着には程遠い国家では、軍隊はしばしば文民統制の有効な行使あるいはその存続に対する潜在的な脅威となりえるという⁽¹⁾。この点から、民主化の途上にある新興国家における軍の創設は、現代の政治学とりわけ安全保障研究においても一般的な関心の対象であり続けている。

このような潜在的な意義や関心にもかかわらず、現代の旧ソ連・中央アジア諸国における軍建設や文民統制については、必ずしも十分な研究の蓄積がなされてこなかった。1990年代には、ソ連軍の解体とともに連邦を構成していた各国軍が編成された経緯について、いくつかのまとまった成果が発表されてきたが⁽²⁾、中央アジアに特化した議論は殆ど見受けられなかった。その理由の一つとして、各国軍に関わる情報についての制約が考えられる。研究者が各国軍について分析するために必要な材料に乏しい、あるいは国ごとに情報公開の程度に差があることが、中央アジア各国軍の研究を妨げる要因の一つとなってきたといえるだろう。

エリカ・マラトの近著『中央アジアの軍と国家』は、このような制約を伴いながらも——彼女自身が文中各所で資料的な制約、特にウズベキスタンとトルクメニスタンでの公開情報の乏しさを指摘している——、中央アジアの人々が最初に遭遇した「ソビエト的組織」である赤軍の出現（9頁）以来、この地域で形成されてきた軍隊の歴史およびその現状、さらに

⁽¹⁾ Diamond and Marc F. Plattner (eds.), *Civil-Military Relations and Democracy*, Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1996, pp. 4–5.

⁽²⁾ 代表的なものとして、Roy Allison, *Military Forces in the Soviet Successor States* (Adelphi Paper 280), London: The International Institute for Strategic Studies, 1993; William E. Odom, *The Collapse of the Soviet Military*, New Haven and London: Yale University Press, 1998.

は中央アジアを取り巻く地域安全保障のあり方について概観を試みた貴重な仕事である⁽³⁾。評者は、率直なところ、国際関係やアイデンティティ形成について論じている後半部（4章～6章）の記述がやや平板で常識的な議論に終始している印象を持ったが、前半部のアフガニスタン戦争従軍者の聞き取りを踏まえた議論（第2章）や、各国の軍建設や政軍関係についての比較研究的な考察（第3章）は、これまで手薄であった中央アジアの軍研究を補う興味深い論点を提供してくれているのではないかと、という読後感を持った。以下では、これら二つの章を中心に本書を紹介してみたい。

本書最大の「売り」は、不足しがちな公開情報を補うように、豊富な関係者へのインタビューを分析に反映していることであろう。特に第2章では、1980年代のソ連軍によるアフガニスタン介入について、中央アジアのアフガニスタン退役軍人会（国ごとに組織されており、ウズベキスタンのものが6万5千名以上の会員を擁し中央アジア最大であるという）のメンバーからの聞き取りを中心に叙述を進めることで、アフガニスタン戦役の多様な側面を捉えようとしている。また、これら退役軍人が個人や組織としてソ連解体後の中央アジア諸国で行っている政治的な活動についても触れ、彼らアフガニスタンからの帰還兵が独立後の中央アジア諸国でいかに位置づけられているか、また、彼らがロシアを含めた旧ソ連諸国の情勢についていかに認識しているかという点についても考察している。

アフガニスタン戦役に対する彼らの心境や立場は複雑だ。アフガニスタンにおいて主力となったソ連地上軍トルキスタン軍管区に属する第40軍の要員の多くは、中央アジア諸国からの徴兵であった。彼らはそれぞれの民族やムスリムとしてのアイデンティティを備えながらも、アフガニスタンでの作戦を「国際主義」的使命感にもとづく行動として正当化する傾向にある。また、ソ連解体後のユーラシアにおいてロシアがとっている大国主義的な行動についても是認する姿勢が強いという。例えば、2008年のグルジアへの介入について、中央アジア諸国は必ずしもロシアを支持しなかったが、アフガニスタン帰還兵はこれを妥当な措置だった、と評価する傾向がある。他方で、彼らは9.11事件以後の欧米軍によるアフガニスタンでの反テロ作戦については否定的な立場をとる（49頁）。

アフガニスタン帰還兵からの聞き取りは、戦役時の部隊内の生活、訓練形態、勤務状況と

⁽³⁾ 本書の章構成は以下の通り。

- 序 章：中央アジアにおける軍と国家建設
- 1 ソビエト体制期の中央アジアの軍
- 2 「我々は戦争に勝った」：せめぎあうソ連・アフガニスタン戦争の記憶
- 3 独立期国家建設の要素としての軍事機構
- 4 ロシアの熊 対 アジアの虎：競合する地域安全保障疑似レジェーム
- 5 中央アジアにおける NATO と西側
- 6 国際主義からポスト・ソビエト民族主義の軍へ
- 結 論

いった話題にも及んでいる。欧米では通説となっている、麻薬やアルコール中毒の蔓延といった部隊内の規律の乱れについては、著者によってなされたインタビューでは強く否定されている（47～48頁）。そのほか、興味深い話題としては、部隊内での民族間のいざこざ、アフガニスタンの住民への民族・宗教的な親近感、さらには中央アジア出身の兵士がムジャヒディーン側に寝返った事例（著者は検証の必要ありと留保しながらも、ビシュケクでの退役兵からの聞き取りを根拠に約100名という数字を挙げている）や、行方不明者（同様に、約300名としている）の存在、ロシア人兵士に比べ叙勲による報奨に恵まれなかったことなどが指摘されている（36～40頁）。

結果として、本書ではアフガニスタン戦争の内実について、中央アジア出身者のまなざしを活かした筆致が貫かれている。また、特に独立後のカザフスタンとクルグズスタンにおける国軍建設について、アフガニスタン戦役経験者が政策の立案や安全保障上の脅威認識について影響を与えてきた点も評価している。具体例としては、第40軍士官として従軍した経験を持つカザフスタンの宗教・民族問題の専門家オレグ・ルベツ（ソ連末期にイスラームに入信、アリ・アブシェロニと改名）が、カザフスタン軍を平和維持活動のために9.11事件以後のアフガニスタンやイラクに派遣する政策決定に関与したことなどが挙げられている（50～52頁）。

独立後の各国軍の編成について考察した第3章は、本書のもう一つの目玉となっている。本書で言及されている独立国家共同体（CIS）統合軍構想とその挫折、それと並行して進められた各国軍の編成についての記述は、先行研究でも数多く論じられてきたところであり、我々の常識を超えるものではない。しかし、本書では、軍編成の経緯をはじめ、軍事ドクトリンの取りまとめ・改訂状況、装備や周辺国との関係構築などが可能なかぎり各国別に並列的に論述されており、本書の結論部（133～139頁）と併せて、現代中央アジアの政軍関係研究について次のような重要な論点を提供してくれる。ウズベキスタンとトルクメニスタンでは比較的早い時期から軍の要員数の拡大に努めていたのに対し、カザフスタンやクルグズスタンでは軍の規模を縮小する傾向にあったこと、独立直後からスラブ系の士官が本国に帰還するなどして多数退役したこと、地元民族出身の兵士や下士官が急造で幹部に昇格したこと、国防相人事をはじめとする各国の文民統制の現状や（特にウズベキスタンで）軍人出身者が州知事など執行府幹部として転出する傾向、などである（60～63頁）。総じて、首相経験者である文民ダニアル・アフメトフが国防相に転身したことに象徴されるように、著者はカザフスタンでは文民統制が著しく進展したと評価する。

さて、ソ連解体後の中央アジアにおける国家と軍を論じるうえで避けて通れないのが、内戦に陥ったタジキスタンでの軍編成をどう評価するか、という問題ではないだろうか。本書冒頭においても、ソ連解体期に同様に反政府系の武装勢力が台頭していたウズベキスタンで

の状況と対比することによって印象的に、1990年代初頭のタジキスタンについて「独立当初、国家が管理しえた武装部隊の著しい不足は、非国家主体が現行政権よりも逸早く武器を確保する余地をつくった。このことが、詰まるところ内戦をもたらした」と描写している（1～2頁）。評者はこの指摘に全面的に賛成する。1990年代のタジキスタンでの紛争が、民族や国内の地方間の利害対立、旧共産党勢力とその反対派との権力闘争など様々な要素が複雑に絡み合った武力衝突であったことは、これまでも多くの論者が指摘してきたところであった。他方、連邦が再編されるなかで、共和国政府が域内の軍事要員や装備を十全に管理しきれなかったことが内戦の重要な要因であったことは、「コロンブスの卵」ともいべき重要な論点である。にもかかわらず、評者管見の限り、この点について十分な研究がなされてこなかったように思う。

このように本書冒頭で、紛争は軍事機構の不十分な管理によって誘引されたという示唆もあったことで、本文中でこれに関わる考察がなされることを期待したが、紙幅の事情もあったのだろうが記述は限定的であった（72～73頁）。連邦制度が動揺する中、他の共和国においても並行的になされていた軍事機構の移行がなぜタジキスタンでは失敗したのか、また、軍事機構の移行について当時のタジキスタンの政権がいかなる意図を持っていたのか、といった点について詳細に追いかけることで、内戦期の軍事状況についてより深く考察することができたのではなかっただろうか。著者は「初期のタジク軍はクリャブならびにレニナバード地方出身のゲリラ集団により編成された」と指摘する（73頁）。これは、1992年初頭に共和国大統領令によって編成が決定された「共和国国防委員会」や、その直前に組織された「国民親衛隊（Национальная гвардия）」を指すものと思われるが、関係者からの聞き取りだけでなく、既に当時政府系メディアで発表されているこれらの組織に関する文書を検討することで、タジキスタン紛争研究に対して貢献するのみならず同国の軍建設についてより興味深い議論が引き出せたのではないかと感じた。

（防衛省防衛研究所）